第１章　現代社会における棚田の役割と現状

はじめに

近年棚田が注目されている。それは米を生産する場としてだけでなく、様々な機能や文化的価値が存在するからである。都市の暮らしに矛盾を感じ、本気で田舎暮らしや農業をやりたいと考える都市住民も増えている。今、全国にはそのような人達が農村地帯に移り住み、地域の人たちと共に農村のなかに溶け込み始めている。またＮＰＯ法人が中心となって、もう一度元気な棚田地域を再生しようとする動きも多く生まれてきている。

しかし、現状は多くの中山間地域が過疎化、高齢化の進行で耕作放棄地が増え、条件不利地といわれる棚田の維持が危ぶまれている地域も多数存在するのも現実となっている。我が国の農政は効率化を追い求め、つまり経済最優先の指向性のなかで、これらの地域は息の根を止められようとしている。

とはいえ、これら中山間地域の棚田を消失させてよいものだろうか。棚田が私たちに伝えるもの、すなわち棚田を生みだしてきた先人達からのメッセージを、今一度見直してみる必要がある。2004 年６月に制定された「景観法」を受けて、全国各地に先人達が残した農村景観を「文化的景観」として後世に伝えようとする動きがある。ただし、そこは住民達が農の営みを続けることによって維持されてきたことを忘れてはならない。

日本列島の景観は、当然のものとして存在するのではなく、農の営みを続ける人々と自然が調和し、折り合いをつけながら創り上げたものである。すなわち人が存在しなければ、その景観は失われることにつながる。そのことを前提に置きながら棚田の現状を見てみよう。

第１節　「粒食文化圏」が発展させた棚田

１．世界の棚田事情

食生活の視点から世界を見ると、「粒食文化圏」と「粉食文化圏」に大別できる。「粒食文化圏」とは、東・東南アジアなどに代表される米などを主食とした地域であり、「粉食文化圏」とは、欧米などに代表される穀物を一旦粉にして加工し食する地域を指す。我が国では縄文時代後期に大陸より稲が伝播し、初期の米づくりが始まった。現代の農村地帯にみる水田の広がり、特に田植え後の「早苗振り」の田や秋の稲刈り前の黄金色の絨緞にも化したような水田の風景は、営々として水田稲作という文化が定着・発展してきたことを示している。つまり米の伝来という出来事がこの国の姿を方向付け、稲作という人の生きる糧を生み出す行為が国を形づくり、人々をとりまく風景・景観を生みだしてきた。

あるマスメディアのアンケートによると、日本人の心に残る風景の第１位は「富士山」であり、第２位に「棚田に広がる黄金色の稲穂と彼岸花、その上に赤トンボが乱舞する景色」との結果がでている。日本人の遺伝子の中に棚田の風景が、原風景として組み込まれていることに今更ながら驚かされる。人々に受け継がれ記憶の上に作られたものが、農村の風景であり、人々の営みの継続、生命の証と言える。

棚田は日本独自の風景ではなく粒食文化圏、つまり水田稲作地帯が広がる東南アジアや東アジアでは普遍的である。インドネシア・中国などの国々では、内陸部に行けば、あちらこちらの谷や山裾などで見られる。フィリピンは日本と地形が近似した島国であり、その上急峻な地形であるため、斜面を利用した棚田が多く存在する。ルソン島中部のサガダでは、標高 1500mの山肌に貼り付くように棚田が広がっている。地域の人達は棚田を「ライステラス」と呼び、生産される米の味には大きな自信を持っている。

中国でも、広西省や雲南省・貴州省などに多くの棚田が見られ、ベトナムのメコンデルタという大穀倉地帯でも内陸部には棚田が存在する。このようにアジアモンスーン地帯といわれる雨量の豊富な地域では、耕

作可能な傾斜地まで水田が広がっており、遥か以前から稲作が行なわれている。一方で稲作主要国であるタイやパキスタンでは、水田の大部分が平地にあるので、棚田の面積はごくわずかと言って良い。またガンジス川河口部に位置するバングラデシュでも、川に隣接する低湿地が主要な稲作地帯となっている。

では「粉食文化圏」には棚田というものは存在しないのであろうか。近年、世界遺産として有名な南米ペルーのマチュピチュやスイス・アルプス山脈の斜面地、スペイン、イタリアなどに段々畑は存在している。このように粉食文化圏の国々は平坦な国土ばかりではなく、稲作のように豊富な水を必要としない作物を主とした食料生産体系を採っている。このことから棚田が展開してゆく根底には、水田稲作という必須条件が必要であり、生産された米を主食として取り入れてきた我が国の生活文化の特徴がそこに表現されている。

２．日本における棚田の役割

次に日本の棚田の現状について述べる。表(Tab)1-1 は九州における農業の主要指標であり、全国に耕地と呼ばれるものが約 4,700,000ha 存在し、その内訳は田が約 2,250,000ha、畑 2,130,000ha となっている。

我が国の国土のうち約 70%が、中山間地（中間地と山間地を合わせたもの）と呼ばれ、総人口の 15%の人々が暮らしている。中山間地の農業生産額が占める割合は、全体の 40%に及んでいる。また山林原野率も非常に高い数値を示す地域ではあるが、我が国の食料生産を支えている重要な地域である。現在、国の食料自給率は 39%（カロリーベース）、そのうち穀物自給率は 28%まで落ち込んでいる。その中で、中山間地の持つ食料生産基地としての役割は、大きく見直されなければならない。

棚田と呼ばれる水田面積は、全国に約 220,000ha 存在すると言われている。その多くが古代より永々と築き上げられ、より広く、より高く、まさに「人・耕やして天に至る」という状況が展開された。

棚田が果たしてきた役割はいかなるものか。もちろん最大の役割は農産物の生産であり、その中でも米作りが主になっていた。また、湧水や川の水を水路で引き込み、水を張ることによって、急峻な山地から海に向かって一気に流れ下る水を湛水する「ため池」としての機能や、湛水が地下に浸透することで地下水の涵養の役割も担っている。水系の上流部に位置する棚田が果す役割は大きいと言わざるを得ない。

近年、気象の激変により降水量が増大し、大規模災害が引き起こされている。それらの原因の多くに、山林の荒廃や棚田をはじめとする農地の荒廃が挙げられる。日本では農の営みのもと、畦畔の草刈や石垣の積み直し、あぜ塗りなど種々手を入れてきた。この大きな負担を伴う行為が、畦畔を土砂崩壊から防ぎ、傾斜地全体の崩落現象を食い止めている。よく引き合いに出されるアメリカの農地は、化学肥料の大量投入によって法面崩落が激しいが、棚田は堆肥等の有機物の投入により土の粘度が高く、大勾配の法面でも崩落しにくい。言い換えれば、古くより行われてきた農法が傾斜地の崩落を防ぎ、傾斜地に続く平地の農地や生活圏を守り続けてきたのである。

他にも重要な役割として、自然環境を育むという点が挙げられる。それを代表する言葉に「農の恵み」がある。これを聞いて多くの人が思い浮かべるものは、食に関することであろう。だが「農の恵み」には、もう一つの大きな側面があることを忘れてはならない。それは「自然環境」が農により育まれていることである。カエルやメダカやトンボなどの自然の生き物は、水田稲作のサイクルの中で、作物と共に育っているのである。九州でよく見られる「薄羽黄トンボ」は日本で越冬できず、冬場は東南アジアへと海を渡る。そして水がぬるむ頃になると、琉球弧の島々を経由しながら日本へと渡り、水が張られた水田に産卵する。世代交代を繰り返しながら秋になると、再び南へと渡って行く。このトンボは、水深が 20 ㎝以下でないと孵化できないために水深のあるため池や川などには産卵しない。彼らの遺伝子にも、水田との係わりがすり込まれている。またカエルやメダカ、ドジョウなども、用水路や田を大きな生活の場としている。農の営みは、その作業の過程で必ずしも目的としていない豊かな自然環境までも生み出している。この点も農、ひいては棚

田の役割である。

近年は行政やＮＰＯ法人、また中山間地域の人々が中心となった「棚田ツアー」や「農業体験教室」などがよく行われ、都市部からの参加者が非常に増えている。参加者達から「自然がいっぱいでたのしい」、「日頃のストレスが、田んぼに立つとなくなっていった」、「農村風景を見る感動を覚えた」という声がよく聞かれる。そこには農村の風景に都市生活にはない、多様な自然や文化、人と人のつながりや異質の時間があり、それが心の癒しとなっている。

この他にも大気の浄化や河川の水量調節等々、多くの機能を棚田地域は有している。今から９年前、1999年５月１４日、石川県輪島市白米地区の千枚田で「地球環境米米フォーラムｉｎ輪島 ～植稲祭～ 田植えフェスティバル」なるものが開催された。この催しに世界37ヶ国の大使や大使館関係者が参加し、棚田での田植えを体験した。それに参加した大使達に取材した記事が、「地上」（1999 年８月号 社団法人家の光協会）に掲載されている。その中にベラルーシのピータ・クラウチアンカ大使が、次のような非常に興味深いコメントを寄せている。「棚田での農業者は生産者であると同時に、生態系を守るエコロジストでもある。私がホームスティをした農家でも、ビニール資材などの焼却を止め、生ゴミ堆肥を使いながら有機米の生産をしているそうだが、そうした取り組みが地球環境保全につながり、大いに見習いたいところだ。」。氏が述べるように、稲が伝来して以来、営々と積み上げられてきた米作りは自然と共生するものとして今に至るも、様々な役割と機能を発揮し続けているのである。このことは、2000年余り前から稲作文化を育んできた日本人の知恵だと言える。

今、その豊かな国土を育んできた棚田地域が、過疎化・高齢化の波に大きく晒されている。地域から子供の声が消え、棚田のなかには虫喰いのように耕作放棄地が点在し、大雨が降ると「土手崩え（どてくえ）」が起こり、周辺へ影響を及ぼしている。このままでは、10年後には棚田の荒廃は今に倍する事態が予測される。国づくりの先達から受け継がれてきた棚田という知恵と文化を、このまま捨て去ってよいものだろうか。真剣に考える時であろう。

第２節　中山間地の現状　－白糸台地の場合－

白糸台地所在の農村事情を把握する前に、前節でも述べた棚田の定義について述べておく。農林水産省の定義によれば「傾斜度が20分の１（20メートル進んで１メートル高くなる傾斜）以上の水田を『棚田』として認定する」とされ、他には何の付け加えもなされていない。非常にシンプルというか、これでいいのかという印象を与える。さらにこの定義に基づいて、1993 年に農水省と日本土壌協会が現地調査を行っている。それによると「棚田」は日本全国で221,067haあるとされており、当時の水田面積の約８％を占めていることになっている。しかしこの時点で、その内の12%が耕作放棄されていることも報告されている。

棚田と称される傾斜地水田の調査は、これ以降実施されておらず、現状を把握しようにも正確な数値も存在しないのである。従って棚田の概念は、今もって地域の人達が棚田だと思い、それを棚田と表現することでしか成立しないのである。かつてアメリカ西部では、等高線に沿って水田の区画が作られていった。しかも一枚の田が１haも２haもの広さである。そのような田がいくつも連なり、あたかも棚田の様相を呈していた。しかし我々の持つ感覚では、狭小な一枚10ａにも満たない、時には１ａ未満の水田が、山べりの斜面に積み上げられているような姿を棚田と呼ぶ。今一度、棚田の実相調査を行うことは急務である。

このことを前提に置きながら、白糸台地の棚田や取り巻いている農村情勢を概観する。実態を把握するために、人口・耕地・農業構造など項目別に言及する。なお数値については、明治15～16年にかけて調査された「熊本県公文類纂『明治郡村誌』」（熊本県立図書館所蔵、以下「郡村誌」）のほか、1995 年以降に実施された国勢調査の結果（以下「国調」）、1990 年以降４ヵ年分の農林業センサス（以下「センサス」）などを使

用する。

１．白糸台地における人口及び世帯数の推移

表(Tab)1-2 並びに表(Tab)1-3 を見てみる。白糸台地に所在する長原・新小・犬飼・田吉・白藤・津留の６地区を見ると「郡村誌」では人口 926 人、世帯数 194 戸であり、「国調」では平成 17 年度で人口 609 人、世帯数 197 戸となっている。「国調」の数値をより細かく見ると、1995 年（平成７）の人口 755 人が 10 年間で 609 人と約 150 人減少し、長原地区に建設された町営住宅の住民約 20 人を差し引くと、年間 20 名近く減少していることになる。世帯数も町営住宅 21 世帯を除くと、40 戸近くの減少となっている。明治期は、一戸当たりの人口が５人平均であるのに対して、2005 年では３人平均であり、世帯当たりの人口減少と同時に、高齢化の進行や次世代の世帯からの離脱などが大きな要因であることが見てとれる。

２．白糸台地の年齢別人口構成

表(Tab)1-4 は白糸台地の年齢別人口の推移を示したものである。明治期には住民の年齢別構成の調査は行われておらず、「国調」の数字を基に検証する。1995 年では 15 歳未満の人口は 138 人、2000 年（平成 12）に 101 人、2005 年（平成 17）に 67 人と、この 10 年間で半減している。比較材料として、『矢部町史』収録の「本町の学校教育」の児童・生徒数の増減を挙げてみる。白糸台地を校区に持つ白糸第一小学校を見ると 1960 年（昭和 35）には 190 人の児童数がある。1965 年（昭和 40）には 144 人、1970 年（昭和 45）には 94 人、1975 年（昭和 50）には 65 人、1980 年（昭和 55）には 79 人となり、一時期の児童数増があるものの右肩下がりの減少傾向にある。

15～64 歳の人口は 1995 年において 424 人、2000 年には 356 人、2005 年は 317 人となっている。この年代でも 10 年間で 107 人の減少が見られ、特に 50 歳以上の年代後半へと、この層の人口構成が移ってきている。65 歳以上の人口になると 1995 年に 193 人、2000 年に 219 人、2005 年 225 人とこの年代層は増加傾向にある。特に顕著な例として、津留地区では 65 歳未満４人に対して 65 歳以上の人口が 34 人となっており、高齢化の進行が最も激しいものとなっている。

このように白糸台地内の集落にとって、住民の高齢化は避けようもないものとして圧し掛かっている。世帯数が多い新小地区、町営住宅がある長原地区では 15 歳未満並びに 15～64 歳年齢が多いものの、他の地区においては 65 歳以上の年齢層が集落の主となっている。現状のままでは近い将来、集落が維持できないような状況に直面することが予想される。

３．白糸台地の農業の推移

表(Tab)1-1、1-2、1-5～1-9 を使って白糸台地の農業実態を把握する。これらの基礎となる数値は「郡村誌」及び「センサス」による。ただし「センサス」に記載されている数値は、集計単位が旧市町村単位（旧白糸村）となるため、白糸台地内の６地区（長原・新小・犬飼・田吉・白藤・津留）に、緑川対岸の菅・目丸の両地区を加えたものである。

ア）農家数

2005 年の数値では全国では総農家数が 2, 838, 000 千戸、うち販売農家数が 1, 952, 900 戸ある。熊本県では、総農家数 74, 200 戸、うち販売農家数では 54, 300 戸となっている。白糸地区の場合、総農家数 237 戸、うち販売農家 185 戸となっている。

農家数の時代変遷も比較する。明治期の白糸村の範囲では男性が戸主である「男農」が 432 戸となっており、現代では 1990 年より５年毎の「センサス」で、1990 年 273 戸、1995 年 261 戸、2000 年 237 戸、2005

年 237 戸と過去の 15 年間で約 40 戸、14%近くの農家が減少し、明治期に比べ半減に近い数値となる。

イ）耕地面積

明治期の白糸台地においては、田が 221 町６反９畝３歩、畑 140 町７反９畝６歩（単位については１町＝１ha、１反＝10ａ、１畝＝１ａ、１歩＝１坪と置き換える）が耕作されている。過去 15 年間では、1990 年は田 236ha、1995 年 219ha、2000 年 204ha、2005 年 189ha と、この 15 年間で水田面積は約 20%近くも減少している。畑地等も 1990 年 54ha から 2005 年 39ha へと 28%もの減少率が示される。これに比して耕作放棄地の面積を見ると、1990 年７ha、1995 年 10ha、2000 年 17ha、2005 年 26ha と、15 年間で４倍近くの耕作放棄地が増大していることになる。

通潤用水完成以前は「畑勝」の村々であった白糸台地において、73 町歩余の水田が生み出された。「郡村誌」による明治期の数値から、緑川を挟んだ対岸の菅・目丸地区を除いた白糸台地の水田面積は 146 町３反余となっている。この数値は現在の水田面積と大差ない。ところが耕作放棄地や転作のため、通潤用水開削以来の水田の実質面積は確実に減少しており、豊かな実りを与え続けてきた水田の維持が困難になっている。

ウ）農業人口ならびに構成

農業人口並びにその構成は、明治期の「郡村誌」は戸数のみ記載しており詳細は不明である。1990 年から 2005 年の総農家数世帯員数は、1990 年 1146 人、1995 年 1029 人、2000 年 948 人、2005 年 824 人となっている。この内農業従事者は、統計数値の集計方法が 1995 年までと 2000 年以降では異なるため、2005 年の数値のみを取り上げると、販売農家 185 戸のうち農業就業者数は 308 人である。年齢構成を見ると、29 歳以下は 11 人、30 歳から 59 歳までが 60 人、60 歳から 69 歳までが 87 人、70 歳以上が 150 人と、圧倒的に高齢者の割合が高くなっている。現状のままでは近い将来、就業人口の大半がリタイアすることになる。

エ）農産物の生産状況

「郡村誌」によれば、明治期における農産物の生産量は、米 2278.2 石（約 341.73 トン）、大豆 121 石（約 18 トン）、小豆 21 石（約３トン）、大麦 756 石（約 113 トン）、小麦 143 石（約 21 トン）、芋 141,690 斤（約 85 トン）、甘藷 149,020 斤（約 89 トン）などが主な産物として収穫されていた。他に、粟、蕎麦、楮皮、茶、鶏卵なども地域の産物として主要な位置を占めていた。

次に 2000 年「センサス」より作物種を拾い上げてみると（統計数字は面積単位となっている）、水稲 148ha、大豆・豆類３ha、茶 15ha、他野菜３ha で、他は作付け農家数のみの記載で、面積としては計上されていない。

このように白糸地区での農業の中心は、水稲作であり、他の品目は明治期には相当の量が作付けされていたが、現代に至っては水稲以外の作付けはほとんど無に等しくなってきている。

以上のように農業の実態について主要な項目をまとめると、世帯数の減少、農業従事者の高齢化、後継者確保の困難さなどによる離農化が進んでおり、先細りの方向に向かっていることは言うまでもない。また農産物の販売価格の低迷、生産原価の高騰により再生産費用の確保ができないなど、農業を継続していく条件は非常に困難と言わざるを得ない。全国の中山間地の多分にもれず、白糸地区においても少子高齢化・過疎化の波は避けられず、また条件不利地であるがゆえに集落崩壊の危機と否応なく向きあわされているのが現状であろう。

第３節．農村維持のための取り組み

１．「中山間地域等直接支払制度」による取り組み

2001 年度、農林水産省は条件不利地である中山間地域で、農業生産の維持を通じて多面的な機能の確保のために「中山間地域等直接支払制度」をスタートさせた。この制度は、欧州などで先進的に行われていた「デ

カップリング」（直接支払）を日本型に焼き直して出発したものである。農業生産条件が不利で耕作放棄される可能性の高い農用地を対象としたもので、全国で1,040市町村、協定数28,515件にのぼる。表(Tab)1-10をみると、交付面積が約66万haとなっており、全国の棚田といわれる地域は、そのほとんどがこの制度に取り組んでいる状況にある。対象となる要件は、①急傾斜の農用地、②緩傾斜の農用地、③自然条件により小区画・不整形な田、④高齢化率・耕作放棄率の高い集落にある農地の４項目であり、他にいくつかの活動事項を設定することにより、直接支払を受けることが可能な制度である。

2006年度より、この直接支払制度の第２期が始まっており、白糸台地の集落でも棚田の維持と集落の維持を図るために、この制度に取り組んでいる。表(Tab)1-11をみると、白糸台地内で長野・新藤・白石・田吉・犬飼・小ヶ蔵・愛藤寺・津留、計８つの集落協定が結ばれている。協定により取り組んでいる面積は、田が1,573,199平方メートル（約157町）、畑が121,440平方メートル（約12町）となっている。これらの面積に受ける直接支払により、農道整備や通潤用水の保全管理、災害による法面崩壊などの補修作業を協同で行っている。

また表(Tab)1-12、1-13を見ると分かるが、近年来の里山の荒廃・原野の荒野化・耕作放棄地の増大などにより、農作物への鳥獣害が増加の一途を辿っている。2005年度の全国での鳥獣害による農作物の被害額は187億円にも上っており、県内総額も５億円に膨れ上がっている。白糸台地内でも隣接する山林の荒廃や、人工造林化の影響で、特にイノシシによる被害が増えており、直接支払の交付金で電気柵などを購入し、被害軽減を行っている。しかし、農用地を全て囲うためには多大の金額が必要なため、その対策に苦慮しているところである。

このように白糸地区の住民達は、中山間地域直接支払制度を活用しながら、後継者不足・高齢化が進むなかでも、何とか地域を守り続けようと取り組みを行っている。最近では、直接支払制度の交付金を積み立てて小型バックホー等を購入し、災害時の復旧などが速やかに行われるような自助努力も始めている。

２.「棚田百選」と「疎水百選」

農水省は1999年に「日本の棚田百選」、2005年には農水省と水土里ネットが共同で「日本の疎水百選」の選定を行った。熊本県から「棚田百選」に11ヶ所、「疎水百選」に５ヶ所が選定されている。この中で山都町より棚田百選において「峰棚田」（中島地区）と「菅迫田」（白糸地区）の２ヶ所が、また疎水百選では「通潤用水」が選定されている。白糸台地の人々にとって心の拠り所とも言える通潤用水が選ばれたことは、大きな支えとして地域を守り続けるための根拠となっているであろう。

おわりに

近年の様々な社会、経済情勢の変化を受けて、農村事情は悪化の一途を辿っている。しかし、その中でも何とか地域と農業、棚田を守り続けようという人々がいることも忘れてはならない。

先日、ある所で見た光景であるが、高齢のおばあさんが背に噴霧器を背負い、何かを棚田に散布しているのに出くわした。そのおばあさんに「何をしているのか」と尋ねたところ、「草枯らし（除草剤）を撒いとるとたい」との答えが返ってきた。その田は休耕田である。そこで「何も作らないなら、わざわざ除草剤を撒かなくてもいいだろう」と問うと、「草を生やして荒らしておくと、ミミズが入り、モグラがそれをエサに取りに来る。そうすると棚田が崩落して隣近所に迷惑をかける。だから迷惑をかけんように除草剤を撒いている。」という答えが返ってきた。その後、「私も何年生きてるかわからんが、５年、10年体が持ちこたえる限りは続けなんたい。」と一人言のようにつぶやき、仕事に戻っていった。

そのおばあさんの年齢、その時79才。今、このような人たちが最後の頑張りで棚田を守り続けている。

先達が築き上げてきた文化を守り続けることを、自らの使命として課している。

素晴しき景観である棚田は、農という行為のもとに築かれたものである。農の営みがなくなれば維持できるものではない。これらの景観、農の営みを維持してゆく方策を、今の人々が持てる知恵の全てを振り絞って考える時であろう。

（長井　勲）

参考文献

・「熊本県公文類纂明治郡村誌」
・『矢部町史』矢部町史編纂委員会 1987
・総務省統計局『国勢調査』1995・2000・2005
・農林水産省『農林業センサス』1990・1995・2000・2005
・『食料・農業・農村白書～21 世紀にふさわしい戦略産業を目指して～』農林水産省　2007
・『九州食料・農業・農村情勢報告』2004～2007 年版 農林水産省九州農政局 編
・『新・田舎人』2007 年第 54 号・2008 年第 55 号　ふるさと保全ネットワーク
・『地上』1999 年８月号　（財）家の光協会 1999

表(Tab)1-1-1 九州農業の主要指数

	総土地面積	総世帯数	総人口	総農家数	販売農家数	農家率	農家人口	耕地面積	田	畑	一戸当たりの耕地面積
	km²	100戸	100人	100戸	100戸	%	100人	ha	ha	ha	ha
全　国	377,915	503,821	1,268,694	28,380	19,529	5.6	83,250	4,692,000	2,256,000	2,136,000	1.7
九　州	42,176	53,601	139,090	4,217	2,934	7.9	11,498	573,600	331,100	242,500	1.4
熊　本	7,405	6,964	18,580	742	543	10.7	2,365	120,400	72,300	48,100	1.6

『九州食料・農業・農村情勢報告』2005 年度版より

表(Tab)1-1-2　白糸地域の村勢　(明治 15 年)

町村名	戸数	内訳	総人数	人数（男女別）	田・畑・山林	牛馬	民業
入佐村	本籍８７戸 社１戸 寺１戸（真宗）	士族４戸 平民８３戸	３８５人	１９６人（男） １８９人（女）	—	牛１０１頭 馬１１６頭	農７８戸・大工職２戸・鍛冶職２戸・木挽職３戸
小笹村	本籍２５戸	—	１０９人	５３人（男） ５６人（女）	—	牛４７頭 馬４４頭	農２０戸
畑　村	本籍３０戸	士族１戸 平民２９戸	１３５人	５８人（男） ７７人（女）	田１９町８反３畝５歩 畑１７町４反５畝９歩 山林８町８反２畝４歩	牛２６頭 馬３７頭	農３０戸
城原村	本籍３１戸	—	１４７人	８２人（男） ６５人（女）	田１５町９反４畝１９歩 畑９町２反６畝６歩 山林９町８反１畝１７歩	牛２８頭 馬２７頭	農２８戸・紙漉職３戸（兼農）
下市村	本籍１５戸	士族４戸 平民１１戸	６７人	３０人（男） ３７人（女）	—	牛１０頭 馬１０頭	農１２戸・旅籠屋１戸・水車蔵１戸・鍛冶職１戸
城平村	本籍７６戸 寺２戸（天台・真宗）	—	４０３人	２０６人（男） １９７人（女）	田４９町８畝２６歩 畑２８町７反６畝２５歩 山林１６町８反８畝２８歩	牛８４頭 馬６３頭	農７５戸・造酒職１戸
浜　町	本籍１８６戸 社１戸（郷社） 寺２戸（真宗）	士族２７戸 平民１５９戸	９３５人	４８０人（男） ４５５人（女）	—	牛５頭 馬７頭	造酒職７戸・酒類受売１戸・質屋３戸・味噌職１戸・醤油職１戸・染物職４戸・旅籠屋職８戸・大工職２戸・左官職２戸 傘張職１戸・暦刺職１戸・水車職５戸・鍛冶職１戸・洗場職２戸
長原村	本籍１８戸 庵１戸（真宗）	—	７８人	３８人（男） ４０人（女）	田２５町２反３畝８歩 畑１５町４反５畝２２歩 山林４町９反７畝２３歩	牛２１頭 馬２６頭	農３２戸 ※本籍の１８戸は誤記カ
目丸村	本籍１２１戸 社１戸	士族１戸 平民１２０戸	６４２人	３３２人（男） ３１０人（女）	田１６町７反９畝８歩 畑５０町８反８畝６歩 山林５５町４反１畝３歩	不明	農１０６戸・水車職１戸・大工職３戸・木挽職５戸・漉櫨職２戸
菅　村	本籍１３８戸 社１戸	士族２戸 平民１３６戸	６６９人	３６６人（男） ３０３人（女）	田５８町５反２畝１０歩 畑２７町６反８畝１３歩 山林４０町２反６畝１９歩	牛２０９頭 馬９６頭	農１３０戸・水車職１戸・酒造職１戸・紙漉職１戸・木挽職１戸・木材商１戸・轆轤職３戸・荒物酒類商３戸・雑業１戸
新小村	本籍６０戸	士族２戸 平民５８戸	２９５人	１４３人（男） １５２人（女）	田５３町９反５畝１５歩 畑２０町１反２畝４歩 山林９町９反４歩	牛８９頭 馬８６頭	農５２戸・染物職１戸・瓦焼職１戸・酒受売３戸・紙漉職１戸
犬飼村	本籍２１戸	—	８７人	４６人（男） ３９人（女）	田１４町７反６畝２７歩 畑５町８反９畝２３歩 山林３町９反１畝７歩	牛２３頭 馬２１頭	農１９戸・石工職１戸
田吉村	本籍３１戸	士族１戸 平民３０戸	１２８人	６４人（男） ６４人（女）	田２０町５反２畝５歩 畑６町８畝２０歩 山林２町１反８畝２８歩	牛３０頭 馬３１頭	農３０戸・左官職１戸
津留村	本籍３１戸	士族２戸 平民２９戸	１５１人	８３人（男） ６８人（女）	田８町２反８畝６歩 畑４町６反１畝１歩 山林３町６反２畝７歩	牛３０頭 馬１２頭	農３１戸
白藤村	本籍３３戸	士族２戸 平民３１戸	１８７人	１０２人（男） ８５人（女）	田２３町６反１畝１５歩 畑１０町５畝１９歩 山林６町８反２畝１４歩	牛５０頭 馬７頭	農３２戸・石工職１戸

小笹・城原・城平・長原・大飼はデータなし　　入佐・小笹・下市・浜町はデータなし　　熊本県公文書館「村誌」をもとに作成　（ただし、田・畑・山林の数値は「郡誌」より）

表(Tab)1-1-3　1995 年から 2005 年における白糸台地の人口及び世帯数の推移

人口動態 / 集落名	1995				2000				2005			
	総数	男	女	世帯数	総数	男	女	世帯数	総数	男	女	世帯数
田　吉	99	52	47	21	88	42	46	23	81	37	44	23
長　原	195	86	109	62	196	92	104	63	163	79	84	56
犬　飼	97	50	47	24	82	41	41	21	75	39	36	23
新　小	209	98	111	49	177	83	94	46	172	80	92	46
白　藤	92	42	50	26	80	36	44	22	80	38	42	23
津　留	63	26	37	31	53	23	30	25	38	16	22	26
白糸台地全体	755	354	401	213	676	317	359	200	609	289	320	197

『国勢調査』を基に作成

表(Tab)1-1-4　1995 年から 2005 年における白糸台地の年齢別人口の推移

人口動態 / 集落名	1995			2000			2005		
	15歳未満	15～64歳	65歳以上	15歳未満	15～64歳	65歳以上	15歳未満	15～64歳	65歳以上
田　吉	12	63	24	12	50	26	9	51	21
長　原	43	117	35	32	120	44	26	87	50
犬　飼	21	54	22	16	43	23	6	48	21
新　小	46	109	54	29	90	58	17	89	66
白　藤	13	50	29	10	39	31	9	38	33
津　留	3	31	29	2	14	37	0	4	34
白糸台地全体	138	424	193	101	356	219	67	317	225

『国勢調査』を基に作成

表(Tab)1-1-5　旧白糸村農家構成

区　分	総農家数	自給的農　家	専　業農家数	兼業農家 第1種兼業農家数	兼業農家 第2種兼業農家数	総農家世帯員数	年　齢　別 0～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70以上
単位	戸	戸	戸	戸	戸	人	人	人	人	人	人	人	人
1990年	273	34	47	61	165	1146	256	89	142	124	204	182	149
1995年	261	44	52	51	158	1029	183	54	117	127	159	207	182
2000年	237	37	※販売農家200戸の内			948	172	65	69	140	111	176	215
			42	25	133								
2005年	237	52	※販売農家185戸の内			824							
			55	36	94								
			販売農家総世帯員数⇒			691	102	38	37	86	108	112	208

『農林業センサス』より

表(Tab)1-1-6　農業構造（実数）

	農産物販売農家数	単一経営農家数	準単一複合経営農家数	複合経営農家数	年齢別農家世帯員数（農家人口：男女計）	14歳以下	15～29	30～59	60歳以上	うち65歳以上	男　計	女　計	農業就業人口（男女計）	15～29	30～59	60歳以上	うち65歳以上	男　計	女　計
単位	100戸	100戸	100戸	100戸	100人	100人	100人	100人	100人	100人	100人	100人	100人	100人	100人	100人	100人	100人	100人
全　国	17,266	13,369	2,973	924	83,250	8,951	12,981	29,626	31,693	26,312	40,929	42,322	33,376	1,934	8,401	23,041	16,403	15,573	17,803
九　州	2,598	1,765	623	210	11,498	1,236	1,678	3,958	4,625	3,844	5,631	5,866	5,193	289	1,448	3,456	2,887	2,534	2,658
九州/全国	15%	13%	21%	23%	14%	14%	13%	13%	15%	15%	14%	14%	16%	15%	17%	15%	18%	16%	15%
熊　本	481	336	111	35	2,365	281	350	828	906	753	1,156	1,209	1,063	58	348	658	540	534	529

『農林業センサス』より

表(Tab)1-1-7　旧白糸村耕地面積の変遷（1990～2005 年）

	経営耕地総面積 ha	種別 田面積数 ha	種別 畑面積数 ha	種別 樹園地面積数 ha	耕作放棄地農家数 戸	耕作放棄地面積 ha
1990年	290	236	22	32	47	7
1995年	263	219	22	22	55	10
2000年	242	204	15	23	86	17
2005年	228	189	15	24	88	26

『農林業センサス』より

表(Tab)1-1-8　旧白糸村農業就業人口および農業従事者数

単位：人

年	項　目	年齢別 16～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70以上	計	備　考
1990年	農業就業人口	10	11	44	56	105	146	59	431	農業就業人口とは、農業従事者のうち主として農業に従事
1995年	農業就業人口	9	5	21	40	72	151	77	375	農業就業人口とは、農業従事者のうち主として農業に従事
2000年	農業従事者数	15	38	59	137	107	172	134	659	農業従事者とは、自営農業に従事した世帯員数
2005年	農業従事者数	9	13	31	79	106	100	155	501	販売農家に限った数値
	農業就業人口	8	3	9	15	36	87	150	308	

『農林業センサス』より

表(Tab)1-1-9　村別物産調査

町村名	分類：動物			分類：植物											
	産牛	産馬	繭	米	大豆	小豆	大麦	小麦	裸麦	粱（粟）	蕎麦	稗	野稲	芋	甘藷
（単位）	頭	頭	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	斤	斤
入佐村	12	9	—	175	72	2.4	256	16	—	192	96	—	—	40000	2000
小笹村	4	1	—	117.4	20.9	—	19.3	8.7	—	28	17.3	0.3	—	—	7200
畑村	—	—	—	172.1	22	2	64	9	2	64	26	—	—	6400	5000
城原村	—	—	—	152	14	1	44	5	—	48	16	—	—	3000	2500
下市村	—	—	1	132	14	1	44	7	3	37	13	—	—	2400	1440
城平村	—	—	—	562.5	27	3	125	32	3	96	32	—	—	12000	6000
浜町	—	—	—	50.4	8	—	20	3	—	16	3	—	—	350	—
長原村	7	2	—	273.3	22	3.2	49.2	11.6	—	55.6	23	—	—	6000	4320
目丸村	16	24	—	108	36	12	384	72	—	336	72.9	4	—	100000	100100
菅村	25	24	—	549.6	15	—	120	30	108	100	—	20	—	—	5000
新小村	5	5	—	380	17	1.8	31	2	14.5	115	23	—	—	4600	4200
犬飼村	6	4	—	225	12	0.8	24	4.8	6	44	12	—	3	8000	8000
田吉村	3	5	—	258.3	7.2	1.2	43.6	3.6	—	13.6	6.1	—	—	8090	6700
津留村	5	3	—	184	3	0.9	36.8	9.9	9.5	24.8	12	—	—	9000	15000
白藤村	4	5	—	300	9.6	1.75	67.2	9.6	12.8	51.2	12.8	—	—	6000	5700

熊本県公文類纂「村誌」を基に作成

表(Tab)1-1-10　平成18年度中山間地域等直接支払制度の実施状況

単位	交付市町村数	協定数			交付面積			加算単価面積	（参考）H17年度交付面積
		集落協定	個別協定	計	ha	基礎単価面積 ha	体制整備単価面積 ha	ha	ha
熊本県	35	1,339	18	1,357	32,332	10,635	21,697	168	32,303
九州	181	5,701	66	5,767	81,114	26,174	54,939	2,077	79,835
都府県合計	943	27,667	441	28,108	338,954	113,646	225,308	10,532	329,161
北海道	97	406	1	407	323,818	23,987	299,831	82	324,562
全国計	1,040	28,073	442	28,515	662,772	137,633	525,139	10,614	653,723

『九州食料・農業・農村情勢報告』2005年度版より

表(Tab)1-1-11　白糸地区の集落別田畑面積

集落名	田	畑
長　野	196.382㎡	30.248㎡
新　藤	456.458㎡	6.773㎡
白　石	152.255㎡	10.982㎡
田　吉	130.047㎡	9.466㎡
犬　飼	264.859㎡	52.561㎡
小ヶ蔵	143.248㎡	11.410㎡
相藤寺	122.906㎡	0.000㎡
津　留	107.044㎡	0.000㎡
合　計	1.573.199㎡	121.44㎡

「集落協定」を基に作成

表(Tab)1-1-12　平成15～17年度農作物被害面積・被害量・被害金額

区　分		平成15年度	平成16年度	平成17年度
被害面積	九　州	18,000	20,000	16,000
(ha)	全　国	131,000	139,000	120,000
被害量	九　州	36,000	39,000	32,000
(t)	全　国	333,000	320,000	320,000
被害金額	九　州	400	440	390
(千万円)	全　国	1,990	2,060	1,870

『九州食料・農業・農村情勢報告』より

表(Tab)1-1-13　九州各県の農作物被害金額（平成17年度）

	合　計	鳥　類	獣　類			
				イノシシ	サル	シカ
熊本県	4.9	1.9	3.0	2.9	0.1	0.0
九　州	38.5	16.3	22.2	18.1	1.8	1.5
全　国	186.9	69.0	117.8	48.9	13.9	38.8

『九州食料・農業・農村情勢報告』2005年度版より